

---

# 追憶捜査ファイル黒子

チラリズム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

追憶捜査ファイル黒子

### 【Nコード】

N4095F

### 【作者名】

チラリズム

### 【あらすじ】

影が無い女刑事『闇絵黒子』と平凡な新人刑事『藤野進』不可思議な事件が正当化された時代で、二人の刑事が様々な戦いを繰り広げるハードボイルドSFファンタジー。

## 第1章 『壊れた殺人鬼』 ファイル1（前書き）

能力者、異常者、魔術を使う者。

死がつきまとう世の中で生きる個性ある人物たちが登場する作品です。

彼らを活かせるように努力は惜しまず。未熟ながら、この作品を自分の人生のターニングポイントに出来るよう頑張りたいです。  
どうか末永くヨロシクお願い致します。

## 第1章 『壊れた殺人鬼』 ファイル1

闇に宝石をばら蒔いたような星空の下、黒子さんは愛車ウィーリイX2000を長谷川宅から少し離れた場所に停車させた。

ここからなら家の様子もよく見えて、黒子さんの黒い車は向こう側からは見えづらいベストなポジション。まさに張り込みにはもってこいという場所だ。

人通りも少なく、たまに冬の寒さに耐えるように背中を丸くしたサラリーマンが家の前を通り過ぎるくらいで支障はない。

「時間が時間だけに人通りはありませんね。でも僕はまだ信じられませんよ……まさか」

犯人が、と言いかけた時……黒子さんがくわえたタバコに火を付けながら僕を見た。

墨汁のような黒い眼に見とれて、僕は言葉をつまらせる。

「いいか藤野……不可思議な事件など百年以上も前に正当化されている。ただ私達はそれを受け入れるしかないんだよ」

そう言くとタバコをくわえたまま、黒子さんは右手でカーステレオの音量を下げる。

ステレオからは丁度日付が変わる午前0時を告げ、天気予報を読み上げる女性の声が聞こえはじめた。

しばらく車内は沈黙になり、少し重苦しい空気になった時。耐えきれずに僕は口を開いた。

「タバコ……変えたほうがいいですよ。もう少し軽い女性用のやつに」

僕の言葉に黒子さんは目を細め、フウと息を吐いてから渋々とタ

バコの火を消した。

「考えとくよ」

『十六時間前』

『大東京警察署』

三月の半ば。

今日、僕は緊張感からか本部勤務初日に遅刻しそうになった。こんなこと学生時代でも無かった事だ。

エレベーターへ向かい、捜査第四課のある七階のボタンに手を伸ばした。

扉が閉まる瞬間、一人の中年男性が慌てながら乗り込んで来て十階のボタンを押した。片手にはブラックコーヒーの入った紙コップを握りしめている、どうやら先輩のようだ。

「ワリイな助かったよ新人君」

本部で見かけない顔だったのか、僕を見るなり新人と気づいて彼はそう言った。

いえ、と言って僕は扉が閉まるのを確認すると今日から務めさせてもらう七階を目指す。

エレベーターが移動している途中、僕は隣でアゴを撫でながら横目でチラチラと見てくる先輩に気がつき思わず訊ねた。

「あの……なんですか？」

「いや〜なんだ。もしかしてオマエさん捜査第四課所属？ て〜と何か？ あの『お嬢様』のパートナー？」

『お嬢様』が誰なのかはわからないが、第四課所属になることは

確かなので僕はそう答える。

「ハッハッハッ、ついに記念すべき十人目か。今回は何日で脱落するかね。」

まるでゲームを楽しんでるように、彼は陽気に笑った。

その態度に気分を損ねたとまではいれないが、少しばかり口を尖らせ乱暴な口調で僕は聞いた。

「その人、厳しいんですか？」

「お、無邪気な質問だな。俺は彼女と直接は組んだことはないが、何より掴みどころの無い性格で有名だ。美人で仕事熱心なんだけど『影がない』のに陰のありそうな女性だよ。なんでも過去の罪滅ぼしのためとかで本部で働いてる噂があるんだ……署長自らの監視付きでな。だが捜査は大胆な行動が目立ち、荒々しくて手に負えない。アンタの前任であるパートナー全九名は彼女の身勝手な捜査にお手上げだったんだろう、一週間もったヤツいねえよ。まあオマエさんの言う通り厳しいっていうのは正解ではあるな、よくするに彼女は限りなく野良に近い飼い猫ってことだ」

あまりに信用性のない話には僕は首をかしげた。

いや、僕の考え方が真面目すぎるのだろう……彼の言う『お嬢様』と呼ばれている女性は話を聞く限り僕では手に負えない人物な気がしてならない。

不安を積もらせながら僕は具体的な特徴などを先輩に聞こうとしたが、先にエレベーターが七階に着いてしまった。

降りる最中、先輩は持っていたコーヒーの紙コップを僕に渡した。半分ほど残っている中身は戦場へと向かう兵士にたいしての饓別のように思えた。

エレベーターが閉まるのと同時にゆっくりと歩きだした僕はそのコーヒーを飲み干して紙コップをゴミ箱へ捨てる。そして流れるような足取りで進み、気付いた時には捜査第四課の扉の前に立っていた。

コンコン

返事はない。しかし中から感じる人の気配。

僕は中の様子を確認する前に扉を開けて一声をあげた。

「失礼します。本日付より四課に配属になりました藤野進ふじのすすむです。宜しく願います」

敬礼とともに扉はガチャリと閉まる。

……と、同時に僕の体は硬直した。あまりの部屋の状況に驚いたからだ。

部屋中タバコの煙が染み込み、なんとも陰気で飾り気の無い部屋。机に座り肘を立てて指を組んでいる小太りな男性が一人。茶色のソファーにタバコをくわえながら仰向けで寝転ぶ性別不明な人が一人。

僕の声、そして僕が入ってきた事に気付かなかったのだろう。二人して何やら言い合っている。

「監視社会・大東京都市。君の言う税金のムダ使いによる監視カメラ大量設置のおかげで、ヤクザがらみの詐欺師と銀行強盗を同時に逮捕……そして暴れている君の姿をバッチリとカメラにおさめれたワケだ」

寝ている人物にキツく当たっている男性は、どうやら本部の杉田署長のようだ。

「だか暴れるにもほどがある。あの場にいた一般市民もとも病院送り……またギャンプルに負けてイライラしていたのは分かるがね。加減と言うものを君は知っているか？」

「私に目をつけられた阿呆なアイツらが悪いんですよ。まあ署長のおかげでデスクワークが苦手な私でも始末書を書くのは慣れました」

「慣れてもらっては困るんだよ」

ハア、と署長がため息をついた時……僕は再び二人に声をかけた。僕の声に気付いたのか。ソファーに寝込んでいた人物がピクリと動き、タバコの灰がポロリと落ちた。

熱がることなく頬の辺りについた灰を払う。スツと起き上がり、座ると同時に不機嫌そうな顔で僕を指差した。

「署長……コイツはクビだ。寝タバコの新記録に挑戦していたのにジャマをしたわ」

「ええ！」

彼女の突然のクビ宣言に僕は驚き、思わず声を上げてしまった。

「落ち着きたまえ藤野くん。闇絵くん、彼は今日から君のパートナーになるクラスAの藤野進くんだ。今朝話したろう」

ええ、と彼女は不機嫌そうな顔を維持したまま足を組んで言った。この人が先ほどの先輩が話していた『お嬢様』と呼ばれている女性だろう。

美人で真面目そうな外見、どこことなく妖艶な顔立ち。黒のスーツが似合うスラッとしたスタイルで髪は肩くらいまで伸びた黒色。何故か両耳の上部分だけ髪は白色をしている。

しかし、一番驚いたのは彼女の足下だった。

「影が　ない？」

そう、彼女には影が無かった。

先輩の言っていた『影がない』とは文字通りの意味だった。

なぜ、彼女は普通でいられるのか不思議で仕方ない……誰もがそう思うだろう。

「毎度毎度たわけた面構えなヤツをよく見つけてくるな署長は、いい加減笑えないわ」

「口を慎みたまえ闇絵くん。私は君の上司だぞ」

ヒラヒラと手をあげて、彼女は了承の合図をだした。

「さっそくで悪いんだが二人には現場に向かってもらいたい……君も仮眠は十分にとれたろう」

署長は彼女に目をやった。

彼女は再び黙って合図をだした。

僕は机の上に置いてあった青色のファイルを署長から受け取ると、扉を開けて彼女が出るのを待った。

彼女はソファーに掛けてあった、これまた黒色のトレンチコートを羽織り部屋を出る時に僕と目を合わさずに呟くように言った。

「……闇絵黒子<sup>やみえくろこ</sup>だ。私に付いていけないと感じたら、遠慮せずに私の前から消えてもらって構わないぞ」

そう言って彼女は一度も僕を見ることなく地下駐車場へ向かった。

クラスAは警察官のエリートを意味する。本部所属初日から、段取りよく現場へ向かわされるのが何よりの証拠。

自慢ではないが、僕もそれなりに努力をしてきた結果がコレだ。

だが、彼女……闇絵黒子は僕のキャリアに興味なしと言った様子。地下の駐車場に止まっている黒い車。

それに乗り込む彼女に続き、僕は助手席に座った。

誰が見てもわかるような外車。僕は車に詳しい方ではないが、それがウィーリイX2000という有名な車だと分かった。

車内の綺麗さ、マフラーの音。かなり愛着のある車のようで、ようやく彼女の普通らしさを見たような気がした。

車は走り出す。

目的地は約二十キロ先の南部公園。署長から渡されたファイルによると、本田製薬で働く女社長『本田なおみ』が死体で見つかったらしい。

詳しくは現場で見ることにしたが、車内は葬式のように静かで暗いムードだった。

外の景色は行儀よく並ぶビルやマンション、ニュースを流す電光掲示板ばかり。

が、すぐに景色は変わり壁に描かれたグラフィティアートが目立つようになった。

もうすぐ現場に着くようだ。

すると彼女は黒色のケータイを胸ポケットから取り出すと片手運転で電話をはじめた。

「ヴィンセント。今日の昼頃、姫子の様子を見に店に寄らせてもらうからそのつもりでいてくれ」

早々と用件だけ言うとかータイを切って車を出た。慌てて僕も彼女に続く。

木漏れ日射す現場にはすでに警察官が多数。黒子さんは公園のほぼ中央にあるシートを被せた遺体の前に立つ二人の男に話しかけた。白髪混じりの如何にもベテラン刑事がしゃがみ込み、シートを捲って黒子さんに遺体を見せる。

遠くから見ていた僕は、その無惨な遺体が視界に入るとともに嘔吐してしまった。

「　　　　　がぁ！」

「まだまだ現場慣れしてない若造だねえ」

タバコを吹かしながら立っている中年の刑事が言った。

黒子さんは僕の方へ一度だけ振り返ると軽いため息をもらしてしゃがみ込み、隣にいる刑事に語りかける。

「まだお迎えがこないのか横山のジイさん？」

「いやあ久しぶりだね闇絵ちゃん。同僚のマイケルが事件を起こした時に世話になって以来だから一年ぶりかな。交通課に配属されてからは楽させてもらってるよ……闇絵ちゃんも体に無理させずウチに来たらどうだい？」

「交通課にいたら腐るだけよ……遠慮するわ」

すると、中年の刑事が話を割るように黒子さんに問いたました。  
「どう思う闇絵？ お前の相方が吐き出すくらいが無惨なバラバラ死体だ。害者の名前は『本田なおみ』 本田製薬で働く三十二歳の若社長で、殺されるような動機は今のところ無い。とりあえず鑑識は中森先生に頼もうと思うが、まずはお前の『アレ』を頼みたい」  
「あのヤブ医者のような中森にか？ やめといった方がいい。私が後で別のヤツに連絡をとろう」

遺体を見てから気分が悪くなっていた僕は、ようやく落ち着いてくるや否や横山さんというベテラン刑事に手招きされた。  
近くに寄ると、ニッコリと微笑みながら横山さんは黒子さんを指差した。

「君は闇絵ちゃんの『アレ』を見るのは初めてだろう？」  
見ておくといい。彼がそう言つと、黒子さんは目を閉じて遺体の上に自分の右手をおく。

次の瞬間。

僕は目を疑いたくなる光景に遭遇した。

黒子さんの体はボンヤリと青白く光だし、周りには同じく青白い蛍火のような小さな光の玉が無数に浮いていた。

「く、黒子さん コレは！？」

「死体は語らないけど記憶は語るのよ」

黒子さんを覆う光は公園という名のステージで今にもコンサートが始まりそうな、そんな眩い光だった。

## 第1章 ファイル2

……私が影を失った『あの日』から目覚めてしまった能力がある。同僚は皆。マザーコンタクトだの大層な名前をつけたが、ただの検索能力である。

生者死者問わず、その場の過去の情報などを引き出す能力。

話し方、身体的状況、持病、出身地、職業、家族構成、客観的情報など本人ですら知り得無いことまで知ることが出来る。

だが、調べられることは人それぞれ異なる。

人の情報にはプロテクトが存在するのだ。

私の能力は、そのプロテクトを可能な限りこじ開ける程度の力しかなく、私は決して万能ではない。機械のように優れてはいないため、そういった優れる仲間も自然とできた。

私は普通の人より優秀であり、それは異常とも便利な道具ともとれる意味を持つ。

まさに本部の飼猫だ。

しばらくして、黒子さんを覆う光が消えた。

僕は口を開けたまま、その不思議な光景に呆けていた。

「残念ながら彼女は何も見ていない。犯人を見る前に殺された」

何かの呪縛から解き放たれたかのように、彼女はゆっくりと立ち上がる。

「本田なおみはファイルどおりの女だよ。いくつか存在したプロテクトはいずれ分かることを祈るだけだ」

現場に残る二人の刑事にそれを告げると、車の鍵を手に歩き出した。サツサと来い新人、と黒子さんは僕を呼ぶ。僕は二人の刑事に一礼してその場を後にした。

黒子さんに追いつき、停車させていた車を前にして僕は何気なく口を開く。

「あのー。僕が運転しましょうか？ BMWなら前に友達のを運転させてもらったことがありますし」

「断る。そのつもりなら署からお前に運転させていたよ」

案の定、アツサリと断られてしまった。

スポーツ仕様の新車だ。確かに今日会ったばかりの相手に易々と運転させたくもないだろう。

車に乗り出し、黒子さんはケータイで先ほど言っていた鑑識の者に連絡をとる。

しばらくすると遺体に乗せた救急車が走りだし、それを確認した黒子さんは車を走らせた。

移動中。

相変わらず僕と黒子さんとの間には見えない壁がある。

これからパートナーとして一緒にやっていく以上、少しずつでも親密になっておかなくてはならない。僕はそんなことばかりを考えていた。

前を睨み付け、タバコを吸いながら運転している黒子さんは視線をそのままに、いつまでも呆け顔な僕に話しかけてきた。

「世間知らずのエリートには少し刺激が強すぎたか？」

「いえ、さっきのアレって……害者の記憶を読み取ったんですか？」  
ああ、と黒子さんは呟くように言つと赤になつた信号を見て車を止めた。

ハンドルにもたれかかるようにして信号待ちをする彼女の姿は、あくまでも隙をみせない百獣の王をイメージさせる。

僕は躊躇わずにその王に問う。

「その力つて、その影が無いことに関係あつたりするんです？」

「ほう……なかなか鋭い観察力だな。それに発想力もいい。先ほどの侮辱の言葉は訂正しよう」

黒子さんの意外な言葉に僕は目を丸くした。

「それで……黒子さんの影は今どこに？」

「さてね。私に付いてくるのが嫌にでもなつたんだらう？」

誰にでもわかる彼女の軽い冗談。

その言葉は僕の心を少し安らげてくれた。この人への警戒心は好奇心へと変わりつつある。

僕は無邪気な子供心を出すように質問を続けた。

「いつでも使えるんですか？」

「アレか？ そうだな。あの検索能力は多用しない方が良い気がするのだな……日に一回、多くて二回を目処に使用する。いざ使えなくなつたら不便ではある」

信号が青に変わると、黒子さんのウィーリィX2000は勢いよくマフラーを吹かして周りの車に続く。

「だがな、力を身につけた人間は社会から外れやすい。私はまだ利用されるぶん運が良いが、大抵のやつは孤立して化け物扱いだ」

「いや、僕は見た目通り鈍い人間ですから、そんなこと微塵も思わないですけどね」

この言葉を発した時、僕の目には黒子さんが少し笑つたように見

えた。

「だろつな。本部で見た時からどの程度の器かは把握できたよ……  
藤野進」

『大東京警察署・鑑識課・待合室』

詳しい鑑識の結果が出るまでの時間、僕は待合室で待機していた。

僕は備え付けの椅子に座り、味からして安っぽいブラックコーヒーを飲みながら静かすぎる場の雰囲気になんとも落ち着かないでいた。黒子さんは壁にもたれながら相変わらずタバコを吸っている。

僕は椅子に座るよう彼女に勧めたが断られてしまった。

途中、黒子さんの吸うタバコの灰を確認した四足型の掃除機ロボットが彼女のもとへ向かい灰皿を取り出した。

コチラヘドウゾ、と片言の話し方をするロボットに黒子さんは少しばかり目付きが変わる。その目は決して穏やかではなかった。

灰を捨てた黒子さんは去っていくロボットを視界から消えるまで見続ける。そんな彼女の姿を見て僕は勝手に解釈してしまった。

この人はロボットが嫌いなのだ。

しばらくして受付から呼び出され、僕は二号棟へと向かう。

待合室のある一号棟からセキュリティドアを一つ開けて二号棟へ入ると、先ほどまでとは明らかに空気が違っていた。

粘り気のある嫌な空気が肌に感じて居心地が悪い。

少し歩いた所に孤立された部屋があった。

扉に『担当医・木村忍』と書かれた名札が少しばかり外れかけていて情けなく思えた。

コンコン

「木村先生。闇絵刑事がお見えです」

受付の人の言葉に反応してか、こちらに向かってくるスリッパのパタパタという荒い音が中から聞こえた。

「いらつしゃいお嬢様！」

中から現れた人物は勢いよく扉を開けると、黒子さんめがけて飛び付く。

しかし見事な黒子さんのボディブローによって抱擁を拒まれた。腹部を押さえ、その場にしゃがみ込むこの女性が木村忍先生のようだ。

少し大きめの白衣を羽織り、黒のロングヘアーに赤色のヘアバンド。あまりに似合う黒縁メガネが彼女の魅力を引き立てていて美人だった。

「どうぞ……中へ」

引きつった笑顔がなんとも痛々しい。

「美鈴ちゃんありがとな。後で旅行先で買ったクッキー持ってくから受付の皆で食べてや」

はい、と忍先生に返事をして受付の人は戻って行く。

中へ入ると普通とは程遠い、なんともバランスの悪い部屋だった。どうやって使うのかわからない器具があると思えば、ゲーム機や漫画が無造作に置かれている。その部屋の中央にある台の上には『本田なおみ』の遺体が横たわっていた。

「流行って……またアメリカ？」

「今度はフランス。いいでゝあつちは昔と変わりなく景色キレイやし、料理も新鮮で最高やったわゝ」

旅行先での出来事を軽くまとめて話した彼女は、視線を黒子さん

から僕に移す。

「さてさて自己紹介まだだね。ウチは木村忍きむらしのぶいます。まだ三十路の一手手前やから、そこそこヨロシク」

「どうも。藤野進です」

曇ったメガネでジロジロと僕を観察しながら彼女は黒子さんの肩をポンッと叩いた。

「何人目の相棒や？」

「そんなこといちいち覚えてない」

十人目ですよと言いかけたが、どうでもいいことなので僕は口を閉じた。

「お二人さん何か飲む？」

「これからヴィンセントの所で飲むから私はいらない」

「僕も結構です」

そっか、と残念そうにする忍先生を急かすように黒子さんは『本田なおみ』の遺体を腕を組んで見下ろす。

「……で、どうだった？」

「そんなこと言うて、大抵のことは分かってるんやろ？ 横山さんからアレ使ったって聞いたで」

いつの間にか忍先生の表情も仕事モードに切り替わっていた。

僕も気を引き締めて遺体を見る。

自分でも驚くくらい、公園で見た時とは違い「この」遺体には慣れてしまったようだ。

「専門家の意見を聞いた方が確実にしょ……あなたが私の知る鑑識バカの中で一番信頼できるから指名したのよ」

「お誉めの言葉ありがとございます」

忍先生は黒子さんに深々とお辞儀をすると、ズレたメガネの位置を戻しながら結果を発表した。

「死亡推定時刻は昨夜の十時……十三分！」

声を張り上げて忍先生は黒子さんの顔を覗き込む。

「十時十五分だ、忍先生」。本田なおみは時間に厳しい性格で、死ぬ間際にも腕時計で時間を確認している」

クイズ番組で答えを間違えた解答者のように、指をパチンと鳴らして悔しがる忍先生。気持ちを切り替えて話を続けた。

「コホン！ えゝ身を守ろうとする手に防御創の痕跡もないことから、犯人は背後から彼女を殺害した。しかも聞いて驚きなやゝ」

少し間をおき、一呼吸してから口を開く。

「衣服なんて関係無く、僧帽筋からバツサリと首と体がお別れしてもうたんや。最初は左腕を切り落とされたんやけど、もはやコレは普通の人間の仕業や思われへんな」

うむ、と言って黒子さんは忍先生を評価した。

「彼女の記憶を覗いた時に、彼女の視界から前方へ飛んだ左腕が見えた……まず間違いないな。その後すぐ、振り返る前に首を飛ばされて記憶の続きを見れなくなったことから人間の腕力ではあり得ない切断能力だ」

二人の会話に僕はただ口を開けて聞いていた。

「切り裂くジャックも驚きですね」

僕に背を向けて立っている黒子さんの表情は窺えなかったが、僕の何気ない一言に忍先生だけが笑ってくれた。

「臭いがしたな」

黒子さんがボソツと言った。

僕と忍先生は顔を見合わせて首をかしげる。

「彼女が殺される瞬間……嗅ぎ慣れた臭いがしたな」

「血やないの？」

「いや、今は思い出せそうにない」

そう言うとき黒子さんは部屋の壁に掛かっている時計を見て部屋を

出ようとした。

時刻はもうすぐ正午になろうとしている。

「じゃあ失礼するよ忍。また何か分かったら連絡を寄越して」

「あゝい。お嬢様に期待されても自信ないけどな」

ヒラヒラと手を振り、彼女は部屋を出る僕達を見送った。

黒子さんはどうやら今から『ヴィンセントの店』に行くようだ。

「にしても黒子さんの知り合いの鑑識課にあんな綺麗な女性がいたなんて少し驚きましたね」

相変わらず僕の言葉に黒子さんは振り向いてまではくれなかった。

確かに今のは黒子さんに失礼過ぎたかな。

しかし、彼女の口から耳を疑いたくなる言葉を聞いた。

「確かにアイツは綺麗な『男性』だな」

……僕の中で何かが崩れる音がした。

## 第1章 ファイル3

大東京警察署・鑑識課の施設から車で十分と行った所にある繁華街と住宅街のちょうど間辺り、少しばかり人気のない場所にソレはあった。

『空間喫茶・スケルトンエンジェル』

僕は停車させた車の窓からその店を見て思わず声が出た。

「昼間からヘビーすぎませんか？」

店の壁は派手なラクガキで、とてもじゃないが喫茶店に見えなかった。

天使の翼を生やしたガイコツの絵が壁のほとんどを埋めつくしている。

なかには奇妙な悪魔のような生き物も描かれていた。

「たわけたことを言っていないでサッサと降りろ」

僕が車から降りると同時に、最近女性に人気のある原付バイク『ティア』に乗ってくる人物がコチラに向かって来た。

バイクを黒子さんの車の横に止めると、その人物は半ヘルを取って驚いた顔で話しかけてきた。

「あれ？ 黒子さん今日店に来るって連絡ありましたっけ？」

その人物は何とも可愛らしい女の子だった。

年齢は高校生か大学生といったところ、黒髪のロングでモデルのようにスタイルが抜群。クマのヘアピンが印象的だ。

格好は上着はともかく下はバミューダパンツなのがまだ寒い三月には不釣り合いに思える。

「ああ、店に直接電話したんだが……見たところ開いてないよう

だが？」

すると彼女は両手を腰にあて、膨れ顔で怒りだした。

「とつくに店開く時間なのにテンチヨーまだ寝てるんだわ！ きつと黒子さんの電話とつた後に二度寝したんですよ！」

呆れた顔をしたかと思うと、彼女は黒子さんと僕に向かってスミマセンと頭を下げる。

僕達は手を横に振って頭を上げるように言った。

「黒子さん今日は何曜日ですか？」

「火曜日だ」

「ならココですね」

店の窓際に並ぶ植木鉢の前に立ち、右から二番目の鉢の下から店の鍵を取り出して店に入る。

「中でお待ちください」

彼女は切り替わり早く営業スマイルで僕達を一階に待たせ、二階で寝ていると思われる店長を起こしに行く。

店の中は外と違い、普通の喫茶店だった。あの外見だとバーのよな店でもおかしくはないと思っていたのだが。

カウンター席に腰かけると黒子さんが僕にボソツと呟く。

「藤野、耳を塞げ」

「え？」

しかし、僕が耳を塞ぐ前にソレはきた。

「テンチヨー！！」

店長を起こす彼女の怒鳴り声が店中に響いた。

「ッ！」

僕だけ耳を塞ぐのが遅れて鼓膜が破れそうになる。

しばらくして。彼女はバンダナを口にくわえ、エプロンを付けな

がら階段を降りてきた。

黒子さんは少し笑みを浮かべて言う。

「女房は大変だな雪名」

「誰が女房ですか黒子さん。あんなヘラヘラした人が夫ならコツチから願ひ下げです」

赤いバンダナを付けながら彼女は言った。

「黒子さんはいつものミルクジャム入りコーヒーのクリーム乗せで、相方さんはカプチーノ……ってアレ？ 知らない顔？」

棚からコップを出しながら彼女はキョトンとした。

「また替わったんです？」

「ああ、前のヤツはクビだ。名前も忘れたな」

「うわ……西島さん可愛そう」

黒子さんとお喋りしながら、セッセと店の準備をしている彼女の苦勞を知ってか知らずか、この店の店長が意外なところから現れた。

……ムギユ。

「きやあああ！」

彼女の背後から胸を鷲掴みにする大きな手。

彼女はすぐに振り返りパンチを繰り出すが避けられてしまった。

百九十センチ以上ある大きな体で素早い身のこなしをするこの人物がこの店の店長らしい。

白髪のアートヘアで黒いバンダナ。アゴ髭も白く、なによりその長身のおかげでエプロンが小さく見える。

しかし顔立ちは良く、カッコイイ大人の男性だ。

「これで雪ちゃんの胸揉み記録は九十五勝一敗に更新だ。いや、雪ちゃんは身長も胸も小さいね」

ニコニコとした笑顔で店長が言った。

「テンチョーが大きいんですよ。私はこれでも百六十五ありますし、毎日牛乳も飲んでます。それよりテンチョー……ズボン穿いてくだ

さいよ」

寝ぼけていたのかボケを狙っていたのか、僕と黒子さんが言わないかわりに彼女がアツサリとツツコミをいれた。

パンツをさらけだした店長は慌ててズボンを書く。

「あとテンチヨー、目障りですから早くヒゲ剃ってください」

「ダンディな感じになろうと思ってたんだけどね。でも剃っちゃったら、あまりのカッコ良さに雪ちゃんメロメロになっちゃうかもよ」  
上目遣いで彼女は店長を見る。

「ご心配なく、なりませんから。本当にテンチヨーまともな死に方しませんね」

「そう？ いやゝありがとう」

「誉めてませんよ」

なんとも息のあった‘夫婦漫才’に見とれてしまった。

そんな中、黒子さんは辺りを見回すと座っていた席を立ち歩き出した。

向かった先には、人形のように椅子に座っている一人の少女がいた。

「元気だったか姫子？」

「……うん」

黒子さんはその少女の頭を撫でた。

その子は何とも不思議な少女だった。

年齢は小学校の高学年くらい。

髪は肩までウェーブのかかった金髪で、雪名という子と似ている今度はネコのヘアピンを付けている。

服装は、どこかのお嬢様学校の制服のような格好で何より彼女はずっと目を閉じているのだ。

側に首輪をしている茶色い毛並の大きな犬がいる。

首輪には『レオン』と書かれていて、名前の下に永久盲導保険の文字があった。

永久盲導保険とは。寿命がきてもクローン技術による記憶と経験の脳遺伝プログラムにより、主が死ぬその日まで盲導犬として生き継がれる少し残酷なシステムだ。

その大人しい盲導犬の頭も撫でる黒子さん。

盲導犬が側にいるということは、少女は目が見えないことは明白だった。

「姫子、目はどうだ？」

「大丈夫だよ黒子。いつも通り何も見えない暗い闇……『白い光』は見えてないよ」

少女は黒子さんに見せるように見えない目を開いた。

一瞬で閉じたその目を僕はハッキリと見てしまった。

何故か彼女の眼球は血のよう赤かった。

「そうか。くどいようだが『白い光』が見えてしまったら、私がお前の両目を殺さなければならぬ」

少女は少しだけ笑みを作った。その笑みはどことなく悲しみの笑みにも見てとれた。

「うん。三年前の約束……だね」

奇妙な会話のやり取りに僕は痺れを切らして話しかけた。

「あの黒子さん、できれば皆さんを紹介して頂けると嬉しいんですが」

そうだな、と言って黒子さんは店の人達を順番に紹介した。

「この子は神宮寺姫子<sup>じんぐうじひめこ</sup>。三年前に私が拾ってワケありでココに預けている」

拾って、という言葉が出た時点で僕の理解できていない。

「それと、このスケルトンエンジェルの唯一の店員で綾瀬川雪名と店長のヴィンセントだ」

「僕のことは普通に店長と読んでくれよ」

健やかな笑顔で店長が言った。

「は、はい」

すると雪名ちゃんがカウンターから移動して、姫子ちゃんのもとへ歩み寄る。

「黒子さん。姫の相方を一名紹介するの忘れてますよ」

雪名ちゃんは座り込み、レオンの両頬を摘まんで少し低い声で喋りだした。

「俺はレオン様だ！ ここでは一番年上なんだぜ。姫にちよつかい出したらタダじゃ済まさねえぞ小僧、肝に銘じておけ……ワン！」  
店の雰囲気が一気に和み、笑いが起きた。

雪名ちゃんに頬を摘ままれて嫌がるレオンを見て僕は腹を抱えて笑った。

順番的に次は僕だと思い自己紹介をする。

「僕は今日から四課に配属になった藤野進です。ヨロシクお願いします」

店長と雪名ちゃんが拍手をした。

「なかなか男前じゃないですか？」

目を細め、今にもニヤオンと言い出しそうな口と獲物を狙う猫のような目つきで雪名ちゃんは僕の顔を覗き込んだ。

「ハハハッ。ところで、この店は何で『空間喫茶』って呼ぶんですか？」

その質問に雪名ちゃんは一度だけ店長の様子を伺い、店長が頷くのを確認してから口を開いた。

「ここは特別な空間なんですよ」

「特別な空間？」

「はい。普通の人間はこの店には絶対に来れないんですよ」

その時、店長が話に割って入った。

「来れないと言っても君みたいに黒子ちゃんに連れられたら来れるけどね」

はあ、と僕は返事をした。

「じゃあ、雪名ちゃん達も普通の人間じゃないんだ？」

雪名ちゃんは少し緊迫した口調で答える。

「はい。私達……普通じゃないんです」

一瞬、店の中が静かになった時。姫子ちゃんが僕に囁くように言った。

「あなた……悲しい人ですね」

その言葉に反応したのは僕以上に黒子さんだった。

黒子さんは険しい顔で姫子ちゃんを見た。

「オジ様。私はココアが飲みたいです」

姫子ちゃんの注文に笑顔で返事をする店長は準備を始めた。

黒子さんは先ほどの意味ありげな言葉を姫子ちゃんに聞いたただそうとした。

その時だった。

プルルルルッ

プルルルルッ

黒子さんのケータイが鳴った。

電話に出た黒子さんは用件を聞くと、雪名ちゃんが作ったコーヒを飲み干して僕の名前を呼ぶ。

「藤野行くぞ。二人目のバラバラ死体が見つかった」

「えっ！ あ……ハイ！」

「姫子ちゃん、言葉の気をかけながら、僕も今日で三杯目のコーヒを飲んで黒子さんを追いかけた。」

「またおいで藤野くん」

「店長の言葉に手を振って答え。」

「僕は店を出た。」

## 第1章 ファイル4

普通なら穏やかなハズの一日というのは、立場によってはこれほどまでに違ってしまうようだ。

スケルトンエンジェルを出た僕達は陰風吹き荒れる中。車に乗って今日二人目のバラバラ死体が見つかった黒屋コーポレーションへと向かい、そして再び無惨な遺体を目の当たりにした。

黒屋コーポレーションは大きな会社だ。

ビルの高さもそうだが、様々な金融会社との繋がりがある。詳しくまでは分からないが銀行を管理する会社だ。相当溜め込んだりしているのだろう。

そのビルの最上階である五十階。窓から大東京都市を見渡せる社長室にソレはあった。

「黒子さん……なんですコレ？」

視界に入るのは鮮やかな赤色。そして無数に転がっている元々は人だった肉片。

それは一人の人間によるものではなく、どうやら複数の人間のバラバラ死体のようだ。

社長室に敷いてあるじゅうたんは灰色から赤色へと染められていた。

僕は血の臭いで鼻が曲がりそうになる。

黒子さんは部屋の外で待機している刑事に話しかけた。

「身元は？」

刑事は手帳を片手にスラスラと読み上げる。

「殺害されたのは本馬毅<sup>ほんまたけし</sup>年齢は四十六歳。黒屋コーポレーションの社長です……あと本馬毅のボディガードが四名同じくバラバラに」

「ああ、この前テレビに出ていたヤツか。顔は覚えている」

そういつと黒子さんは部屋の机の近くにある首を指差した。

アレだな、と言ってその首に歩み寄った。

「まったく。コレを一日で二回使うのは久しぶりだな」

黒子さんはしゃがみこむと本馬毅の頭部に手をあて、本田なおみの時と同じように体が青白く光だした。

彼女は検索能力を再び発動させたようだ。

「黒子さん。あの……僕に手伝えることは？」

「ない。少し時間はかかるがそこでジツとしていればいい」

自分はあまりにも無力だった。

今できることといえば、少しでも犯人の手がかりを掴めるように黒子さんに向かって祈るくらいしかなかった。

地獄絵のような部屋の中で、黒子さんは一つの屍に意識を集中させる。

僕はまるで音のない世界に迷い込んだかのように静かな部屋で佇んでいた。

人というのはコインの表と裏に似ている。

どんなに他者への印象が良くても、心の中には闇がある。

私が本馬毅の記憶を覗き込むと、それはすぐに見ることができた。ある夜の倉庫で密会する本田なおみ。そして長谷川カンパニー社長『長谷川玄八郎（はせがわ げんはちろう）の姿がそこにあった。

長谷川は二十六歳という若さで会社を成功させ、瞬く間に大金融のトップへと上り詰めた実力者だ。

それからの三十年余り、長谷川カンパニーの名が新聞に載らないことは無い。

「電話でも話したとおり、俺はこの件から下ろさせてもらっ

本田なおみは吸っていたタバコを地面に捨て、荒々しく踏み潰した。

「何を言ってるのよ本馬。私なんか会社の財産を全て長谷川さんに投資してるようなものなんだから……途中下車なんかできないわよ」

どうやら本馬と本田の二人は何かしらの結託関係にあるようだ。

それもそのハズだ。本田製薬と黒屋コーポレーションは長谷川カンパニーを親会社とする組織なのだから。

あまりに遠縁なため少し調べただけでは分からないがコレでハッキリとわかるし、いくら間の抜けた警察でもすぐに関連性には気付くハズだ。

「スマートなビジネスと言っただろう本馬くん」

長谷川玄八郎が口を開いた。あまりにも低いその声は、不気味なほどに倉庫内に響く。

「スマート？ フンッ！ 正式製品ロボットの密売がスマートだと！？」

鼻で笑った本馬だが、その言葉からストレスが感じられるのは明確だった。

「俺は国内密売に絞るというから安心してたのに海外へ密輸する計画の事は知らされていなかったぞ。今の時代に貿易絡みになるといくらアンタでも危険だ」

「知る必要は無いと判断したのだ、計画は順調だよ本馬くん」  
そこで本田が割って入る。

「長谷川さんに付いてれば安心よ。鈍感な警察にはバレるわけがな

いわ」

「そんなこと言って、前に宴会場で酔った勢いから部下の一人にバシテ相談の電話を寄越したのはドコの誰だ？」

その言葉に鋭くなる長谷川の目に、本田なおみが目を逸らした。

「あれは大丈夫よ。ちゃんと口止めしてるし」

「フン……どうだかな。酒癖の悪い女だ、またいつ口を滑らすか分かったもんじゃない」

そこで長谷川は持っていた杖をコツコツと鳴らしてその場を去ろうとした。

足腰が悪いと聞いてはいたが本当のようだ。新聞やテレビの前では意地を張り、杖を使っていないところを見るとプライドの高い男だと見てとれる。

「この話は後日にしよう、私の連絡を待て」

そう言い残し、長谷川玄八郎は闇の中へと姿を消した。

後日。長谷川からの連絡は無いまま本馬が殺される日を迎える。

密会にいた二人から密輸の件が外部に漏れる可能性を恐れ、長谷川がおこなった犯行だとココで私は理解した。

社長室にいた本馬は何らかの殺気を感じると、ボディガードを部屋へ呼んで陣をとらせた。

この時、本馬は本田なおみの死は知らない。

ガシャ！

本馬毅の視界ではとらえられないほどに。得体の知れない何かが壁や天井を縦横無尽に飛び回り、素早くボディガードのダイヤモンドドフォーメーションをかい潜る。

そして本馬毅は本田なおみ同様、背後から首を切断された。

どうやらボディガードが殺されたのはその後のようだ。

私は覗き見た記憶の中では、その者の視覚と聴覚……あと嗅覚をほぼ確実に感じることが出来る。

しかし感覚などは感じた試しがない。

枯渴した機械音。そして鉄の臭い。

ああ……そうか。本田なおみの記憶の中で嗅いだ臭いはコレだったのか。

こんなことだったのか。

私は本馬毅の意識から離れると、立ち眩みに似た感覚を覚えた。

「……ふう」

大きく息を吐き、額に手をあて落ち着かせる。

やはり一日に二度のコンタクトはなるべく避けるべきだろう。身体に負担がかかることが今回で学習できた。

「どうでした？」

間の抜けたバカ面をした藤野が小走りで近づいてくる。

「早急に事は運んでいる感じだな。この事件は偶発的じゃない」

「計画的ですか？」

「なんだ藤野？ この事件がそこらの小便垂れが起こした通り魔殺人とでも思っていたのか？」

いえ、と言つて藤野は首筋に手を当て顔を伏せた。

この事件の黒幕と犯行を行なったヤツが大方わかった私は、ある『人物』が脳裏に浮かびだしてならなかった。

犯人のもとへ向かう前に参考がてら会うべきではないだろうか。

「この現場の後は野郎に任せればいい。行くぞ藤野、詳しくは移動しながら話してやる」

「ちよつと黒子さん！」

特殊部隊にいた頃を思い出す。もし戦闘になった場合は相手が相手なだけに派手に暴れれそうだ。

## 第1章 ファイル5

お前にとっては信憑性のない話だがコレは事実だ。

黒子さんは僕にそう言った。

彼女はあくまで冷静を装い、しかし心の内面ではメラメラと闘志を燃やすように鋭く眼を尖らしている。

車という名の檻の中で猛獣と一緒に閉じ込められている気分だった。

「長谷川も、あの二人も考えてることは分かりませんね。お金なら十分過ぎるくらい懐に収めているというのに」

「例えそうだとしても、金の成る木は手放したくないというのが本心なんだろ」

そう言っただけで黒子さんは不適な笑みを浮かべた。

「それよりもボディガードのダイヤモンドフォーメーションを軽々と破ったヤツだ……久しぶりに骨のあるヤツが出てきたぞ」

表情はそのままだったが、明らかに黒子さんはこの事件を楽しんでいた。

「本馬のボディガードに潜ればさらに『ヤツ』のことが分かったがな」

「一日に何度も使用するものじゃない……でしたね」

ああ、と言っただけで黒子さんはアクセルを踏む足に力を込める。

僕は黒子さんが参考がてらに話を聞きに行く『人物』のいる場所を尋ねようとした。

しかし彼女は僕の態度から察したのか、先に口を開いた。

「これから愚劣な『人物』に会いに行く。特殊な犯罪者だから気を引き締めておいた方がいいぞ」

はい、と答えて僕は窓から外を眺める。

そろそろ日が暮れる頃だ。

着いた場所は大東京警察・特殊管理刑務所。

白い壁で覆われた建物で、中に入ると濁った重みのある空気を感じた。

なんでも人間と呼ぶにはあまりにもかけ離れた化物を収容する施設らしく。周りに病院や学校といった施設などを設置できない危険区域、大東京下層街に建てられている。

そこで働いている人間も普通ではない。

白い防細菌服を着て、酸素マスクまで付けている。

しかし、黒子さんはそのままフロントロビーを抜けて面会室へと向かう。

もちろん僕も後を追うしかない。

面会室は小さな四角い部屋で、中央には机と椅子が置いてあるだけ。

本部の取り調べ室でもこんなには簡素の無い部屋ではない。

その部屋に入ると、すでにその『人物』は椅子に座って黒子さんを待っていた。

「どうも闇絵黒子さん。アナタと会えるのを楽しみにしていましたよ」

その『人物』はスキンヘッドの少し細身の男だった。

しかし、この施設にいる以上は彼も普通のヤツでは無いことが僕でもすぐにわかった。

まるで体温を感じさせない白っぽい肌。少し錆びた臭い。なににより彼は僕達が部屋に入ってから一度も瞬きをしていない。

あまりにも不気味だ。

「思った通りのたわけたヤツだな……オマエ」

そう言って、黒子さんは向い合わせで椅子に座った。

僕は彼女の後ろで様子を伺う。

「今回の事件の参考に話を聞きにきたの、よろしく佐々木文雄」ささき ふみお

「今はBK 6713って名前なんだけどね……まあいいや」

男は紛れもない人型のロボットだった。

ロボットが犯罪を犯すのは、過去に一度も例はない。

それは藤野進にも理解していた。

「黒子さん。どういことですか？ この佐々木文雄という人物……」

藤野は黒子の耳元で呟く。

「マスコミやメディアには知られていないがコイツはロボットで唯一、三人の少女を拉致し殺害した犯罪者だ」

藤野は驚きの顔を隠せなかった。

そんな顔を見ても、佐々木の表情は変わらない。

人形のように座っている。

「ロボットといっても、完璧なロボットになろうとしたイカれた人間だかな」

その言葉に反応したように、佐々木文雄は口を開く。

「ツラいな。君も俺を理解してはくれないか」

黒子は彼に向かって鼻で笑う。

「五年前。俺を逮捕したあの美人はアンタの師匠らしいな」

「ああ。だが私はその現場に居合わせてはいなかったよ」

「強い女だった。俺の楽しみをアッサリと邪魔して叩きのめされた。アレは、痛かったな」

佐々木は初めて二人に目をそむけて話を続ける。

「その弟子であるアンタも強いのだろ。だから俺は大人しくアンタと会話をしようと思う」

それは助かる、と言って黒子は今回の事件を彼にまとめて話した。

佐々木は聞き終わると少し黙りこんでから語りだす。

「十年前に一人の男が女性型ロボットに恋をした話を知ってるか？  
異常なまでの彼女への愛が原因で、その女性型ロボットはマンシ  
ヨンの屋上から自殺をした」

「なにが言いたいんだ？」

藤野が佐々木に聞いた。

「人形やロボットには魂が宿る。まれにゴーストをもつということ  
だ」

さらに佐々木は話を続ける。

黒子は視線をそのままに、タバコに火をつけた。

「俺もそうだった。そして今回の犯人もそうだ」

藤野は再び驚いて眉にシワを寄せた。額からは少し汗が流れる。

「ほ、本当ですか黒子さん？」

「ああ……今回の犯人は長谷川宅のロボットだ。少し古いタイプで  
手入れはされていないだろうがな」

「言ってることがよくわからないんですが？」

「おそらくだが人工のチップが自我に目覚めた、これは異例なこと  
だぞ藤野」

藤野は髪を掻きむしり、再び視線を佐々木に向ける。

「しかしロボット工学三原則に反するんじゃない？」

ロボット工学三原則。

第一条・ロボットは人間に危害を加えてはならない。

第二条・ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければなら  
ない。

第三条・ロボットは第一条、第二条に反する恐れのない限り自己  
を守らなければならない。

「簡単な話だ。長谷川宅のロボットは三原則を無視できる。そのう  
ち人を殺すのに理由はいらなくなる」

佐々木は相変わらず冷静に答える。

若すぎる刑事はお手上げといった状態だ。

「それはオマエのように人間がロボットになった場合、犯罪に手を染める可能性はあり得る。実際にオマエがそうだが……」

佐々木は黒子の言葉を引き継ぐように言う。

「ロボットが人間のように犯罪を犯す可能性か？」

「ああ……一応だが例が無いからな」

佐々木はぎこちなく笑みを作った。改めて二人に自分はロボットなのだと知らしめるように。

「俺が保証する。そいつは殺しを覚えた」

その言葉を聞いて、黒子は勢いよく席を立った。

藤野は一瞬だけ肩をすくめる。

背を向ける彼女にイカれたロボットが最後の言葉をかける。

「また遊びにきてくださいよ」

黒子は背を向けたまま一言呟く。

「今度会うときは……地獄でだ」

そして二人の刑事は振り返ることなく部屋を出ていった。

看守が面会室へ入り、佐々木に声をかける。

「より良い人間社会すら築き上げれない人間が、ロボット社会を築くなんて矛盾してると思いませんか刑事さん？ ……だから俺は人間を辞めたんですよ」

佐々木の囁くような弱々しい小さな声は、それでも狭い面会室に虚しく響いた。

黒子さんが刑務所を出ると、彼女のケータイが鳴った。  
電話の相手はケータイから漏れだす大きな声で僕でもすぐにわか

った。

「何かわかったのか忍？」

鑑識課の木村忍。三十路テマエの美人なオカマからの電話だ。

「いや、あれからすぐに情報屋の知世ちゃんに連絡とって電話で聞いたんよ」

「それで？」

「さすがは知世ちゃんや！ 犯人は庭師が使うようなタイプの電動ハサミを使うロボットやって教えてくれたんよ。遺体に付着した物を提供したらアツという間に調べてくれて」

「だてに押し入れて一日中パソコンをいじってるだけはあるな。彼女には度々世話になる」

さらに細かく情報を聞き出しながら黒子さんは車に乗り出して僕に言った。

「いよいよ犯人の『城』へ向かうぞ。早く乗れ」

「はい！」

車は長谷川宅へと舵をとった。

## 第1章 ファイル6

闇に宝石をばら蒔いたような星空の下、黒子さんは愛車ウィーリイX2000を長谷川宅から少し離れた場所に停車させた。

ここからなら家の様子もよく見えて、黒子さんの黒い車は向こう側からは見えづらいベストなポジション。まさに張り込みにはもってこいという場所だ。

人通りも少なく、たまに冬の寒さに耐えるように背中を丸くしたサラリーマンが家の前を通り過ぎるくらいで支障はない。

「時間が時間だけに人通りはありませんね。でも僕はまだ信じられませんか……まさか」

犯人が、と言いかけた時……黒子さんがくわえたタバコに火を付けながら僕を見た。

墨汁のような黒い眼に見とれて、僕は言葉をつまらせる。

「いいか藤野……不可思議な事件など百年以上も前に正当化されている。ただ私達はそれを受け入れるしかないんだよ」

そう言つとタバコをくわえたまま、黒子さんは右手でカーステレオの音量を下げる。

ステレオからは丁度日付が変わる午前0時を告げ、天気予報を読み上げる女性の声が聞こえはじめた。

しばらく車内は沈黙になり、少し重苦しい空気になった時。耐えきれずに僕は口を開いた。

「タバコ……変えたほうがいいですよ。もう少し軽い女性用のやつに」

僕の言葉に黒子さんは目を細め、フウと息を吐いてから渋々とタバコの火を消した。

「考えとくよ」

さらに時間が過ぎていく。

長谷川宅へ向かうのにかなりの長い間、車を運転していた黒子さんの体が気がかりだ。

できることなら休むように声をかけたいが、真剣な顔で長谷川宅を凝視する黒子さんを見て僕は心配することをやめた。

「忍先生からの情報はなんだったんです？」

「ああ、情報屋をやっている私の知り合いの子から収穫を得たそうでな。犯人であるロボットの名前はキール」

家庭用のロボットなどに製造番号ではなく、愛着ある名前にすることは今となつては普通なことだ。

「なんでも普通では販売されていない長谷川宅専用の特別なロボットらしい。特別……なんとも都合のいい言葉だな」

知世という子の情報力に僕は感心する。

なるほど。闇ルートでの電化製品、ロボットに至っては人工チップに異変が起きる可能性も決して無いとも言えないだろう。

黒子さんは忍先生から聞いた情報を僕に話すと、何かに気付いたように車の戸を開けて外に出る。

「どうしたんですか？」

「……何か変だ？ どうも静かすぎるぞ」

「もう就寝してもおかしくないですし、静かなのは当たり前ですよ」

僕の言葉に耳を貸さずに黒子さんは長谷川宅へ向かって歩き出し、上着の内側に手を入れてガンホルダーから銃を取り出す。

見た目はベレッタのようだが、かなり改造してあるようだ。

引き金の辺りに見慣れないギアのような物があるのがチラリと見

えた。

「大丈夫なんですか黒子さん!？」

「私の本能的直感を信じる。乗り込むぞ」

僕達は不自然に鍵が開いている玄関から堂々と長谷川宅へ侵入した。

家の中は極めて物静かで暗い。広いリビングの天窓からの月明かりが唯一の光。

長谷川玄八郎は子宝に恵まれずに妻と二人暮らし、その妻とも今は別居中らしい。

玄関が開いていたことから、もはや安心できる状況ではない。罠に誘い込まれたことも十分にあり得る。

しかし黒子さんは躊躇うことなく、二階へ上がる階段を上る。

さすがは長谷川宅の豪邸。アパートに暮らす僕は普通の一軒家に住んでいる人にもスゴいと思うぐらいだが、この部屋数には目が眩みそうになる。

僕達は長谷川玄八郎の書斎に侵入して銃を構える。

「は、長谷川玄八郎!？」

予想だになかった光景に僕は思わず声が出る。

長谷川玄八郎の変わり果てた姿が部屋に横たわっていた。

現状からして争った形跡はなく、だが確実に正面から刃物で刺されている。

「とうとう親殺しも『遂行』したな」

黒子さんはその場に少し立ち止まるが、直ぐ様に部屋を物色しだした。

「見てみる藤野」

長谷川の机の上から黒子さんは一枚のカードを取り上げる。

辺りを警戒しつつ、僕はソレを拝借した。

「ロボットの免許証？ 人間と同じでロボットも資格を取る必要があるとは知ってましたが」

「コイツは庭の草を刈る以外に肉を解体できる」

免許証の実物を見るのは今日が初めてだ。実は家庭用のロボットを僕は持っていない。

キールは料理師と車の免許も持っているようだ。

「こーいうのって各種の個人会社でデータをインストールするだけで資格が取れるんですよ」

「しかし手続きが面倒くさいらしいがな」

僕は証拠を何点か押収できまいかと、長谷川の遺体を調べた。

足元に落ちている長谷川の杖を拾おうとした時。天井に違和感を感じた。

そして肌に突き刺さるほどの圧迫感と寒気。

もちろんそれは黒子さんも同じように感じ、二人で上を見上げた。

ガチャ！

天井に張り付き、殺気を殺して僕達の様子を伺っていた殺人鬼に僕の反応は少し遅れた。

「阿呆！ 離れる藤野！」

黒子さんの声に僕はすぐに壁際へ退く。

彼女は神経を集中させ……ふう、と長く息を吐いた。

そして刺すような目で人型の殺人ロボットを睨みつけ、完全なる臨戦態勢に入った。

一方のキールは鈍い音とともに床に着地し、僕には目もくれずに黒子さん目掛けて走り出す。

黒子さんは素早く銃をキールに向けて引き金を引いた。弾丸は右肩に命中するがキールの勢いは止まらない。

彼女は首を掴まれ、壁へ激しく押し付けられた。

足の踏ん張りも利かずに軽々と押し付けられたことから、キールの力が驚異であることが見てとれる。

さらに追い討ちをかけるように、右手で黒子さんの腹部を殴り付けた。

「ぐっ！」

彼女の吐血は首を掴むキールの左手に付着した。

そのまま流れるような早さで右手の肘を曲げ、まるで折りたたみのサバイバルナイフのように右手を軽式型チェーンソーへと変形させた。

つんざくような激しい音で起動するチェーンソー。

どうやらキールは電動ハサミから肉切り用のチェーンソーへと武器を取り替えていたらしい。さらに攻撃力を重視した武器だ。

今まで硬直していた僕の体は、その光景を目の当たりにするとともに解放されて動き出す。

「黒子さん！」

援護に向かう僕だったが、黒子さんの反撃に再びその体は硬直した。

黒子さんは首を掴んでいた殺人鬼の左手に右手で掌打を浴びせ、手が緩んだところで右のハイキックを頭部に命中させる。

黒子さんの動きにまったくの無駄はなかった。

吹き飛んだキールは砕けた頭部の破片に気を配ることなく低い体勢で走りだし、黒子さんの襟首を掴んで本棚へ叩きつける。

黒子さんは落ちてきた数冊の本を気にすることなく、一定の距離が空いたのを機に左手に持っていた銃で狙撃する。

三発の弾丸のうち命中したのは一発、キールの左足のアキレス腱を撃ち抜いた。

人間ならば致命傷だが、キールは猛スピードで窓から逃亡。

ガシャーン！

黒子さんも立ち上って後を追いつつ、窓から外へ飛び出す。

着地とともに銃を構えるが、すでにキールの姿は見当たらない。

「……くそつ。だが逃がしはしない」

窓から身を乗り出していた僕は、すぐに階段を駆け下りて黒子さんのもとへ。

僕は彼女と違って窓から飛び出す勇氣などはなかった。

「どこへ逃げたんでしょか？」

「問題ない。左手に発信機を取り付けてやったからな」

彼女は驚くほど抜け目が無かった。

あの戦闘の間にそんな判断ができるとは。

僕達は車に乗り込み、キールの追跡を開始した。

## 第1章 ファイル7

キールに取り付けた発信機を受信して、車のナビに映し出す。どうやらターゲットは長谷川カンパニー本社に向かっていると思われる。

「長谷川本社ビルの中に確か高性能技術が備わっている修理センターがありましたよ。自分を修理するつもりですかね？」

その問いに闇絵黒子は鼻で笑って答える。

「私にはかかってこいと言ってるように思えるがな」

途中。キールの走るスピードが彼女の予想を超える速さだったのか、やむ無く高速道路をつかう。

そして彼女はコートのポケットから、先ほど長谷川宅の机の上からくすねてきたと思われる一枚のデータ資料を取り出して目をやった。

「それより藤野。モアリジスタンって知ってるか？」

「あ、あれですね。軍事用シエルターとかに使われてる断破防壁材……って！ まさか！？」

黒子は人差し指を藤野の鼻先に向けた。

「そのまさかだ……ヤツの造りはそのモアリジスタン製。アキレス腱部分は‘マグナム弾レベル’で撃ち抜けたが、ヤツの体のほとんどがソレだ。家庭用ロボットにしては物騒すぎて開いた口も塞がらんだろう？」

まったくもって冗談では無いレベルである。

戦争でもおっぱじめれるかのような機体。

長谷川の手に入れた殺人兵器は初めから戦うための機能を備え付けられて造られたとは思えない戦闘兵器だった。

「そんなヤツに太刀打ちできるんですか？」

「うむ。外装は剥がれても肝心の内部は無傷、運動量も半端じゃな

いうえに装甲の高度も軍事級ときたもんだ。ヤツの機動力を削ぐにはバズーカ砲でも持つてくるべきだったかな？」

闇絵黒子は不適な笑みを浮かべる。

しかし藤野は相手にばかり感心してはいなかった。

異常といえ、そのキールに対等に渡り合った彼女もまた半端ではない。

「僕が思うに黒子さんも十分に『軍事級』だと思うんですけどね。その強さも、その銃も」

「この強化された肉体は私の能力のオマケのようなものだ。だが次は様子見なんて柄にもないことはしないつもりだ……私のペースに引きずり込んでやる」

彼女が根拠のない嘘を言えるような人物でないことは、小一時間ほど対話すれば誰でも分かるくらいだ。

先ほどの戦いは本当に彼女は本気では無かったのだろう。

まさに化物と化物の戦いと言っても過言ではない。

そして彼女はガンホルダーから、先ほど長谷川宅で使用した銃を取り出した。

「そしてこの銃はベレッタを元に私が改造して作った『NDSK』というハンドタイプの拳銃だ。威力と飛距離を二つのギアをいじれば自由に変えることができる」

確かによく見るとトリガー付近にギアが二つ付いているようだ。

彼女の銃に対しての改造技術は、素人の目から見ても器用というレベルを遥かに超えている。

彼女は説明を省いたが、銃身装着照準器の新型ビルホースをはじめ、特別発注である特殊グリップに軽量されたシリンダー。

しかし弾薬は支給用通常弾……つまりは刑事であれば手に入る品だ。

だが火力はギア調整次第では、雑誌を撃ち抜くことすらできない威力からマグナム弾のソレを簡単に凌駕するほどの破壊力をもつ。

拳銃というサイズに収まった悪魔の火器。大型軍用ライフル銃が

可愛く見えてしまう。

「さらに普段はコレに二挺加わるがな。今は二挺ともメンテ中のうち、今回の相手には『魔力を持った銃』はあまり効果に期待できなかっただろう」

黒子のその言葉の理解に苦しむ藤野。

だが紛れもなく、黒子は三挺拳銃使いである。

「とにかくそれでも十分すぎるくらい頼れるってことは理解しましたけど、キールの殺人動機の件は実のところまだ分からないんですよ」

藤野は黒子が異例と言う家庭用ロボット・キールの殺人動機に焦点をおいた。

藤野は黒子の顔を伺う。

彼女の見とれてしまうその美貌から、ナイフのように鋭い眼差しをみせる。

「アイツはね……本田なおみの事件は事故ということにできたんだ」

「……事故ですか？」

「あくまで『命令』したのは長谷川玄八郎だからな。だがアイツはターゲット以外である本間毅のボディガードを四名殺害している……」

「殺人を楽しんだんだ」

キールの変化が見られたのは、本間毅の殺害任務からだろう。

その後のオーバーキルは彼の意味に間違いはない。

「そして主である長谷川本人も殺した」

佐々木と黒子の二人の意見を、失礼ながらも詭弁に思う藤野。

「うむ。AI知識学も本格的に勉強しておくべきだったかな？」

黒子は運転席側の窓を開けて、寒空の夜風を肌身に感じてから口を開く。

「人工知能は単純に言うところコンピュータに人間と同等の知能を実現させるための基礎技術のことだ」

彼女越しに見える眠らない街、大東京都市の高層ビルが藤野の視

界に入る。

妖艶な彼女の美しさに合うネオンサインのその景色は美術的価値すら感じるほどだ。

「アイツはロボット三原則を無視し、学習機能を働かした。そしてAIは部分的に殺人というシステムを構築したんだ。

つまり家庭用ロボットが踏み込んでならない領域に進化して当たり前のように統合し、そして生成して出来上がったのが殺人鬼キールということだ」

藤野は自分の顎に手を当てて、考えながら彼女に聞いた。だす。

「哲学的に例えているなら思考や論理プログラムが人間の基準に並び、ヤツは検証して認識したと？」

「そんなところだが、納得いかないと言った顔だな。ハッキリとした答えが無いと不満か？」

藤野の脳裏では人間と機械の区別をハッキリとさせてしまっているためか理解するのは難しいようだ。

しかしロボットが暴走して自ら殺人を犯した事実に変わりはない。

「コレを佐々木はロボットには魂が宿ると言ったんだ。なんとも笑えない話だな」

はあ、と溜め息をつくように藤野は彼女に対して返事をする。

「しかし黒子さんの知識力はスゴいですね。自分のイメージではコンピュータ関連には無縁かと思ってましたよ」

藤野の問いに彼女は即答で応じた。

「たわけ。私はお前のイメージ通りのアナログな女だぞ……覚えてるだけであって理解はしていない」

黒子の発言に再び藤野は溜め息に似た返事をした。

バリバリバリバリッ！！

直後。ヘリコプターが黒子の愛車の上空を通り過ぎた。

ヘリから聞こえる爆音に、藤野は軽く耳を塞いだ。

「GC42型スナイパーバレー。特殊機動隊のシコルスキーヘリだな」

「本社に向かってますよ。忍先生が連絡したんでしょうか？」

確かに応援を寄越したのは鑑識課の木村忍だった。

知世の情報を黒子に提供後……事件の事の大さを自らの判断で、長谷川宅と本社のビルに特殊部隊の出動要請を杉田署長に提出したようだ。

確かに家庭用ロボットが殺人を犯すという空前絶後の事件に防衛省も黙ってはいない。

「このまま本社に部隊が突撃して事件解決ですかね？」

藤野の言葉にヘリを目で追いながら黒子が答える。

「どうせ持ち場で待機および現状維持が手一杯だろ？ まったく頭のキレるイカれたクソ野郎はいつも敵側だと相場は決まっているな」  
そう言って運転席側の窓を閉める。

「藤野。四課のルールをまだ言ってなかったな」

「ルール？」

彼女は耳に掛かった髪を掻き分けた。

「生死を問わず（デッド・オア・アライブ）。拘束不可の場合は破壊（殺す）を許可されている。ルールに従え」

黒子の教えに藤野は黙って頷き、改めて気を引き締めると徐々に視界に入ってくる長谷川カンパニーに目を尖らせた。

## 第1章 ファイル8

長谷川カンパニー本社の玄関前にはすでに警察官で溢れかえっていた。

数十台のパトカー。確認できる限りだが、上空にはヘリが三機は飛んでいる。

そして一般市民を中に入れないようにビルの周囲を封鎖し、特殊部隊が配置されていた。

彼女が言ったとおり、彼らには現状維持が手一杯のようだ。

車から降りた僕と黒子さんは真っ直ぐに玄関へ向かって歩きだす。周りの人間はそれを止めようとはしない。

すでに黒子さんによる支配は始まっていた。

ココにいる者が束でかかって彼女に勝ることはできないのは明確だ。

黒子さんのジャジャ馬捜査の評判は警察はもちろん、特殊部隊にも知れ渡っているようで、軽く怯えた表情で誰も声を掛けてはいない。

しかし、それは彼女の才気を尊敬と信頼しているからこそ……そんな空気も漂っていた。

そんなとき一人の男が黒子さんのもとへ歩み寄り、恐れを知らずに怒鳴り散らした。

中肉中背でたくましい骨格、キリツとした顔つきがさらに迫力を引き立たせる。

「黒猫！ 貴様 私の管轄で何をしでかすつもりだ！」

虚ろんだ目付きで黒子さんはその男を見て口を開いた。

「これはこれは……防衛省長官のせがれ殿。こんな夜遅くにわざわざ

ざ出向くとはお疲れさまですね」

彼女の態度が彼の表情をさらに強ばらせた。

周りの人間はピリピリと神経を尖らせて二人を見守る。

しかし、黒子さんはそんなことお構い無しといった感じだ。

「四課に管轄など存在しないことはアナタもご存じでしょう？」

「どうしても私をバカにしたいようだな黒猫。部隊の編制を整え次第すぐに突入させる……それまで貴様らは大人しくしている！」

「お断りします。我々は観賞用の魚ではありませんので」

腰に手をあて、見下す姿勢を続ける黒子さんに男の堪忍袋も限界のようだ。

「ほはおう……二人だけで突入するつもりか？ 報告書にどう書くつもりだ？」

「『鉄クズの分際で私に刃向かうなど笑止千万。燃えないゴミを一つスクラップにしました』と書くつもりです」

その言葉を合図にするかのように、男は彼女の胸ぐらを掴みかかる。

後ろで控えていた彼の部下がソレを止めに入って二人を引き離す。彼女は服の乱れを直すと、隊の人間によってすでに開けっぱなしで固定されている自動ドアへ歩きだした。

「くそっ！ 黒猫がつ！」

後ろから取り押さえた部下が、馬を宥めるように男の肩を軽く叩いた。

「落ち着いてください。言っても彼女は検挙率トップクラスなんですから文句は言えないですよ」

どうやらかなりの冷静な部下のようで、興奮する男の乱れた呼吸も徐々に落ち着いていく。

そしてその部下は佇む僕に歩み寄り、耳元で囁くように言った。

「気をつけるよ。彼女は優秀だがキレると性格変わって手に負えなくなるぞ」

「はい……心遣い感謝します」

彼の言葉を頭の片隅に、僕も彼女と一緒に建物に入る。  
なんだかんだで様々な人物から頼られている黒子さんに、及ばず  
ながら付き従えるだけでも僕は光栄だ。

社内は外とは違い静かである。

薄暗いロビー、廊下には足下が見えるくらいの蛍光灯がボンヤリ  
と光っているだけ。

しかし夜目がきく黒子にとっては問題のない暗さだった。

人が誰もいないのは、この会社の警備員が全て二足歩行型のロボ  
ットであるからだ。

問題が起きたところで正確な対処と管理力は人よりも遥かに優れ  
ている……が、今回のような同タイプのロボットによる侵入はまっ  
たくの例外だった。

社内にいる全ての警備ロボットは、キールによつて見事にシステ  
ムエラー状態でマネキンのように動く気配を見せない。

監視カメラも動かない中、平然と動いているのはエレベーターだ  
けだった。

「ほらな。ヤツは誘つてる」

彼女は満足げな笑みを口元に刻むと、受付の前を通つて廊下の突  
き当たりにあるエレベーターへ向かう。

「黒子さん。さっき怒鳴りつけてきた人つて朝倉警部ですよね？」

藤野は彼と直接な面識はなかったが、数々のスキャンダルで世間  
を騒がせている人物だった。

「浮気の常習犯。今時の芸能人より新聞に取り上げられている、有  
名人、だよ。」

まだアレで妻子持ちとは思議なものだな」

黒子は周囲を警戒することなく、エレベーターが下りてくるのを  
待つ。

「アイツの犯罪撲滅運動のスピーチ聞いたことあるか？　ぶっ殺したくなるぞ」

「相当嫌ってますね」

1階に下りてきたエレベーターの扉が開き二人は乗り込んだ。

「アイツは昔から考え方が甘いヤツなんだ。本社を囲んでから突入してもコチラ側に何のメリットも無い。今回の相手には特に速攻が有効なんだよ」

そう言うとき黒子は屋上へのボタンを押した。  
確信はない。

しかし彼女の勘がキールの居場所は屋上のヘリポートだと告げていた。

「キールは法律では裁けない……前例がないのだから当然だな。それに交渉術が通用しない相手であることを肝に命じておけ」

「は、はい」

緊張からか、藤野は自分の左胸に手を当てて深呼吸をする。

エレベーターの中は緊迫した空気が漂っていた。

一階ずつ上がっていく度に、藤野の脳裏に流れるのは不吉なカウントダウン。

屋上への扉が開いた瞬間にキールによる奇襲を受けても不思議ではない。

藤野は自分の上着からデザートイーグルを取り出して、両手でグリップを握って低めに構える。

「オマエ銃の腕前はどうかんだ？」

「あの……実は言う自信ないんですよ」

藤野は苦笑いで彼女の表情を伺った。

黒子は呆気をとられた顔でため息も出ない。

「オマエ本当にクラスAか？」

再び藤野は苦笑いで答える。

エレベーターは間もなく最上階、屋上へ繋がる階段のある広いフロアにたどり着く。

「まあいいよ。オマエは私の後ろで見物していればいい、ただし相手に隙を見せずに気迫を見せている」

藤野が頷くと同時に、エレベーターの扉が開いた。

二人は階段を登って屋上ヘリポートのある扉を開ける。

空に浮かんだ星達は、二人を待ち望んでいたかのように一層と輝きだした。

「子供の頃……空飛ぶ車に憧れたこともあった。タイムマシンのワープ理論と同時にその説は消えたがな」

円形のヘリポートエリアへ向かう数段の階段を上りながら、黒子は独り言のように呟く。

「ロボットは……なぜオマエ達は人の姿を求めた」

彼女には人の姿を模した二足歩行のロボットは特に理解できない存在だった。

いま目の前に佇む『殺人鬼キール』

過去。いくつもの人の死を見てきた黒子にとって、キールとの戦いは一人の‘人間’との戦いに変わりはなかった。

「人はオマエ達が思っているほど素晴らしいものではないと言うのに」

羽織っていたトレンチコートを脱ぎ捨てて、黒を強調したその女は漆黒の闇を連想させる不気味な瞳を輝かせた。

キールは腰を低くして黒子を待ち構える。

今にも走り出しそうな二匹の狼に、藤野は息を呑み込んで見守る。

飛び交うヘリコプターの爆音を無視し……時が止まったかのような一瞬、黒子の声が藤野の耳に響いた。

「解体屋送りにしてやるよ」

## 第1章 ファイル9（前書き）

《内》に書かれている言葉は英語翻訳したものではありません。  
ご理解のほどヨロシクお願いいたします。

## 第1章 ファイル9

黒子による鋭い威嚇の眼光は、人なざるキールにとっては無意味に等しかった。

しかし彼女は闘志を燃やしながら凝視し続ける。

藤野の目からは、彼女が時間をかけて何かを発する準備をしているかのようにも見てとれた。

「同調……確認」

黒子は一瞬。

キールへの凝視を止め、手を胸の中心に当てて目を閉じた。

マザーコンタクトとは違う光。黄色い布のように薄い光が黒子を覆うと、さらに不気味な霧が彼女の周りに発生した。

「《あなたのための私》アーティファクト・オーバーサイド発動！」

彼女を覆う光と煙が消え、再び相手に視線を向ける。

彼女の見た目が変わったところは見られない。

少し様子が違うとすれば表情がさらに自信に満ち溢れているくらいだ。

しかし彼女の中は違っていた。

アーティファクト・オーバーサイドはまだ未完成である。

彼女の足元から消えた影。それが戻る事によって初めてこの力は最大限に発揮する。

しかし、そうで無くても十分と言っていいほどにこの力には「凄さ」があった。

彼女の父親は錬金術師の家系であり、母親は妖術師の家系である。さらに二人とも多少の魔術も嗜んでいた。

だがその類いの力のほとんどは娘の黒子に受け継がれることはなく、唯一このアーティファクト・オーバーサイドは彼女が影を失ってからしばらくして発現した力だった。

しかも。この力は彼女だけに身についたオリジナルの力であり、この力や戦闘能力、そして武装によって……歴代の闇絵家の戦闘者としてはトップクラスに君臨する実力がある。

この力の能力は同調。

彼女の手に触れた物は刀であれ道端にある石であれ、その物の潜在能力を最大限に発揮することができる。

それは人間にも発動が可能だった。

つまり今の彼女は筋肉などの内部の波長を合わせて、全てがベストな状態になったということだ。

さらに。

「久方振りだぞ……コレは」

銃を握る左腕を腰に、右腕は前に差し出し背筋を伸ばして小さく息を吐いた。

『闇絵流古武術』は純粹な強さだけなら武術において一番の格闘術だ。

独特な構えから相手の呼吸を伺い、後は連撃をあたえるだけ。それは機械仕掛けの相手でも問題はない。

行動を先読みして、鉄の呼吸を感じる黒子。

相手にとって不足はない。

黒子は心の中でそう呟いた。

彼女は真っ向から向かってくる相手に過小評価はしない。

しばらく様子を伺った後、先に動いたのは鉄の殺人鬼。

地面を這うように走り出すその姿は、まるでクモのようだった。

高く飛び上がり、黒子の頭上から勢いよく殴りかかる。

一方の黒子は後ろへ飛んで難なく避けた。

アスファルトにめり込んだキールの拳が、その凄まじいパンチの威力を物語る。

再び拳による攻撃を仕掛けるが、彼女の鋭いカウンターがキールの顔を捕らえた。

「シー！」

顔面に三発、ガラ空きのボディに二発の強打を浴びせて鈍い音が響いた。

少しばかり怯んだキールだったが、すぐに黒子の攻撃と同時に己の拳を突き出す。

拳と拳が重なりあつて衝撃波が風を切った。

休むことなく次の攻撃に移るキール。上段の蹴りが黒子の額を掠める。

回避を確認した黒子は右足を蜂のように突き刺したが、相手はバク転をして紙一重で避けられた。

ヘリポートの端に佇む藤野は、ただ驚愕に息を呑む。

彼の目の前で繰り広げられている戦いは想像以上に凄まじかったようだ。

一つ一つの激突に風圧を感じるほど、さらに人間離れのスピードに彼の視力では若干追いつけないでいた。

その驚異と破壊力はまるでアクション漫画のソレと勘違いしてしまっただけだ。

再度、二匹の狼による睨み合いが始まった。

黒子は軽い足運びでゆっくりと位置を変える。

キールを軸に時計回りに移動してから慎重に間合いを詰めていく。さらに彼女は警戒しながら新人の部下への配慮も怠らない。

彼女は可能な限りの完璧だった。

不安要素があるとすれば他者への妨害だが、ここまでくるとそれ  
も考えにくい。

黒子は一度、自分の銃の弾倉を確認してから一旋させて持ち直す。  
一方のキールも動きをみせる。右腕を変形させて装備したのは刃  
渡り三十センチほどの草刈りナイフだった。

これは彼女の読み通りの展開のようだ。

大きなエモノよりも小回りのきく武器の方が素早く動き回る相手  
に効率がよいとキールが判断すると思ったからだ。

「フン……厄介なのは好物だ」

寸分違わぬタイミングで、二人は互いに向かって走り出す。

キールのナイフによる凶刃の一振りは虚しくも空を切り、すぐに  
繰り出した尻ぎ払うような攻撃も黒子の銃で起動を逸らされた。

モアリジスタンほどの強度はないものの、黒子のNDSKでもキ  
ールのナイフを防ぐことができるようだ。

ここぞとばかりに彼女は一発の弾丸を相手のこめかみに撃ち込む。  
至近距離からの発砲に、さすがのキールも体勢を崩したがパンチ  
のキレは落ちることはない。

しかしそれは相手も同じだった。

キールの攻撃を左腕で防いだ黒子は、そのままの勢いで拳を振り  
かざして相手の頭部を叩きつけた。

轟音とともに倒れこむキール。

追い討ちをかけるよう、寝転んだキールに黒子はかかとを落とし  
た。

今の黒子にかかれば、ヘリポートの堅い床もガラス細工のように  
粉々に砕ける。

回転を加えながら黒子の一撃の回避に成功したキール。

しかし右腕のナイフは根元から綺麗に折れていた。

足のつま先でアスファルトの一枚を剥がして蹴り飛ばす。

素手による素早い対処でアスファルトを弾き飛ばした彼女だが、  
一瞬だけ視界を塞がれた後の光景に戦慄を走らせる。

キールが隙をみて藤野を襲いにかかったのだ。  
はた目から見ても優位なのは超人並みの強さをもつ女刑事だった。  
そう判断したキールの選択は勝率を上げるため、人質の確保する  
ことに変更されたようだ。

いつの間にか黒子はキールによって誘導され、自分の背後に位置  
付けていた藤野から距離を離されていた。

デザートイーグルを片手に表情を引き締める藤野。

銃口をキールに向けたものの、瞬時にして目の前に現れた敵に体  
を固まらせる。

「なっ！」

硬直により引き金を引くのが遅れる。

一発の弾丸はキールによって簡単に銃身を掴まれて逸らされた。  
死を覚悟した藤野だったが、キールの背後から迫る影に死の覚悟  
は一気に生の希望へと変わる。

キールの行動は闇絵黒子の想定範囲内だった。

多少の距離が離れたとしても、すぐに追いつける自信はあった。  
しかし、キールの阻止にかかった黒子は直感から悟る。

これは罠だ。

あくまでキールの標的は彼女ただ一人。そのために藤野を利用し  
たのだ。

待ち構えるようタイミングよく向かってくる黒子を蹴り飛ばした。  
ドンツと藤野を押し倒すと、吹き飛んだ黒子を追いかける。

すぐに起き上がり、銃を構える藤野だったが。

「くっ……いつの間に！」

藤野のイーグルは見事なまでにバラされていた。

キールは黒子の襟元を掴み、刃のない右腕で数発殴りつける。  
予想外の角度からの攻撃、膝を使ったりと変幻自在の攻撃に耐える黒子。

形勢は一気に逆転したかのように見えたが、今の黒子にはキールの攻撃に反応できない身体ではない。

正確に致命傷を避けながら、反撃のチャンス伺う。

キールは彼女の銃を掴んで武器破壊を試みる。

が、キールの握力をもつてしてもNDSKはヒビ一つ入らない。

「悪いな、コレは特殊性だ」

チャンスを見逃さず、サンドバック状態から解き放たれる黒子。  
豪快な頭突きにキールは掴んだ手を離す。

「そろそろ終いにしようか」

身体中の裂傷や打撲を気にすることなく、前髪を掻き上げながら黒子は言う。

二人の距離は偶然にも、このヘリポートで始めて向かい合った時と同じ距離だった。

## 第1章 ファイル10

この死闘もクライマックス。

そう思いながら藤野はツバを飲んだ。

その彼の瞳は少しばかり惜しむような瞳にも見える。

自分が危険な目にあつたにも関わらず、まるで舞台を優雅に舞う踊り子のように美しいこの戦いをもつと見ていたい……そんな瞳である。

しかし黒子にそんな余裕は無い。

いつも全力で戦うことを心がけている黒子は、戦いを楽しむことと同じくらいに戦いを長引かせないように意識していた。

決して戦闘狂のように長い死闘は望まない。

例えどんなに優位な戦況でも、瞬時に立場が変わってしまうことを彼女は十分に理解しているからだ。

それにアーティファクト・オーバーサイドの発動できる時間というのも存在する。

影が無いことにより彼女のこの力の発動時間はなかなか短いようだ。

「決めた。土手っ腹に風穴あけてやることにしよう」

グツと拳を握りしめて、黒子は堂々と構えてみせる。

一方のキールも覚悟が出来た様子で構える。

だが勝負は一瞬にして、そして呆気なく終わりを告げた。

「はああああ！」

勢いよく駆け出した黒子に対してキールは遅れて前に出た。

しかしキールの勢いを殺すように、彼女の拳が腹部を捕らえて貫

いた。

強度に絶対の自信があるハズのキールの体は風穴が開く以上に、上半身と下半身が千切れるように離れた。

無数の部品がアスファルトの上に散らばりキールの体は虚しくも落ちた。

遅れて下半身も膝から崩れるように倒れる。

「貴様に言って正しいか分かんが……永遠に眠れ阿呆」

抵抗の様子を見せることなく、キールの機能は停止した。

一瞬にして決着がついたのには訳がある。

アーティファクト・オーバーサイドは錬金術や妖術、さらに魔術的な力が少なからず影響している。

この類いの力を自分の意思では自由に使えない黒子には、この力を無意識に引き出しているという言い方が正しいだろう。

その無意識で全ての属術を一気に撃ち放つことも、一つの属術を撃ち放つこともできてしまうのだ。

これは相手の状況などに影響して、力そのものが自動で最適で有効な術を拳と同時に付加させている。

敵にとってはあまりにも恐ろしい力と言えるだろう。

今回の付加効力は錬金術によるモノであり、本人にとってただのポディブローでも力の影響でキールの体は脆い物質へと変化したのである。

この力により、今では藤野の力でもキールを簡単に破壊できるだろう。

「今までも、そしてこれから私に殺せないモノは無い」

そう言つと黒子はその場に片膝をついた。

同時にアーティファクト・オーバーサイドを解除する。

最後の一撃には力の消費が激しいものだったらしく、さすがの彼女も大きく息を吐いて額に軽く汗が出る。

「まだ慣れんなコレは……それに検索能力も使い勝手が悪いし、得をしているのか損をしているのかイマイチわからん」

「大丈夫ですか黒子さん？」

藤野はすぐに彼女のもとへ向かい具合を伺う。

「ん、骨も内蔵も大丈夫だ。心配いらない」

戦いが終わったのを実感して、藤野は緊張が途切れるように顔を緩ました。

「作ったモノが壊れたのではなく、初めから壊れたモノが作られたんですね」

藤野は倒れて動かなくなったキールを見つめながら言った。

「まあ、その言い方は間違っではないな。なかなか微妙だが」  
そして上空を飛び回るヘリと下にいる警官達を見下ろして、再び藤野が口を開く。

「この事件は独占で黒子さんの手柄ですよね」

「たわけたことを言うな藤野。幾人にも捜査協力してもらったし、私は英雄的なのは嫌いだぞ」

彼女は立ち上がると、藤野に背を向けてさっさとコートを拾って歩きだす。

「それより良かったな藤野」

藤野は首をかしげながら曖昧な返事をした。

「本部の連中が隠しきれなかった場合は表沙汰になって、この事件は歴史の教科書に載るぞ。貴重な体験だな」

その場合は市民も警察も互いに影響が及ぶことになり、藤野は苦笑いを浮かべた。

夜中というより、もはや朝方にちかい現在。

二人はある地下の劇場にいた。

長谷川カンパニー周辺に群れていた同職人種を掻い潜り、やって

来たのは歌舞伎・人形劇場。

「なんでこの時間帯に地下でこんなやってるんスか？」

ガラ空きの観客席、上手の方で座る藤野は隣の席でくつろぎながら劇を見ている黒子に聞いたです。

「ん？ 嫌いか？」

彼女は集中していたあまり、藤野の質問をちゃんと聞いていなかったようだ。

「いや、だから時間帯ですよ時間帯」

「ああ……ここはヤクザ御用達の劇場だよ。表の看板に小さく書いてあつたろ？ いろいろと奴らには都合がいいみたいだな」

やっぱりこの時代の世の中は何か変だ、そう思う藤野。

「警察が堂々とココにいて大丈夫なんですか？」

その問いに黒子は即答する。

「堂々としてるからいいんじゃないか。本部へ戻るまえの息抜きだ、大目にみる。」

それにお前も本部へ戻ってすぐに報告書を書くのも嫌だろ？ そここ署長はうるさいからな」

「そーいう問題じゃないですよ」

藤野は不安げな顔で、だが一緒に劇を見るしかできないでいた。

舞台では二人の操り人形。殿方と花魁との喧嘩の最中だった。

物語は幕末の時代の小さな町で、二人の男女が一夜の恋に燃える単純で分かりやすい話だった。

花魁の持つ蛇の目傘がとても色鮮やかで魅力がある。

藤野は作りの良さに感心する。

「好きなんですか、こーいう舞台劇」

「ああ……歌舞伎や人形劇は好きだ。役者より黒子に興味があると言っべきかな。」

役者は顔が命というだろ？ その顔を隠す黒子は最高の役者だと個人的に思うんだよ。私と名前が同じだから親近感が湧くしな」

そうこう会話をしているうちに劇が終わり、劇場はスポットライトで明るくなる。

二人は席を立ち、表に留めてある車に向かった。途中、黒子はポケットからタバコを取り出して火を付ける。その光景を横で見ていた藤野はハッと気付いた。

「黒子さん。タバコの銘柄替えたんですね」

藤野は口元で笑みを浮かべた。

「さつきココに入る前にコンビニで買ったんだ。これからお前に会う度に指摘されるのはうつとしいからな」

それはブラックスターからハーブ・ス・ルードという女性用の軽いタバコだった。

地下を出る階段を上り、彼女の愛車が姿を現す。

その黒いボディは憎いほどに輝いている。

その車の前に立ち、しばらく考えた黒子は助手席に座った。

「藤野。お前が運転しろ」

「いいんですか？ だって……」

「かまわん。今日は疲れた……安全運転で任せる」

藤野はしばらく佇むと、我に返ったようにパチパチと瞬きを数回してから運転席に座った。

「了解です」

朝日に照らされながら、ゆっくりと車は走りだした。

## 第1章 ファイル10（後書き）

今回『追憶捜査ファイル黒子』第1章が完結です。

まだまだ続きがありますが、なかなか執筆が大変で時間がかかる日々で……でも、おかげで勉強になりました。

なんとも頭の悪くて物語に矛盾や説明不足がありますが、これからも何とぞヨロシクお願いします。

今度はもっと早く投稿できるよう構想を練って頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4095f/>

---

追憶捜査ファイル黒子

2010年10月8日21時52分発行